

中世ロマンと地理 —『イポメドン』をめぐって—

植 田 裕 志

中世ロマンに出てくる地理の記述は、大まかで曖昧なことが多いので、物語を読みながらある土地を具体的に想像してみることなどはできない。しかしときに地名に注意してみると興味深い事実に気づくこともある⁽¹⁾。

たとえばクレチアン・ド・トロワの『獅子の騎士』には「アルゴンヌの森」という言葉が出てくる。イヴァンが自分の槍を折りながら敵の騎士を次々と倒してゆく情景について、語り手は「誰かが彼のためにアルゴンヌの森のすべてを槍にしても、どの槍も前のものと同様にその夜イヴァンが碎いてしまっていただろう」と言うのである⁽²⁾。読者は物語の始めにイヴァンがウェールズのカルドウェルなるところを出発したのは知っている。しかしそれからこの場面にいたるまですでに長らくイヴァンの冒險の旅につきあっている。その旅はどことも知れぬ森を通り城をめぐる放浪の旅である。そんな旅の途中の一場面の描写に、このアルゴンヌ（テクストでは "Argone"、現在のフランス語表記では Argonne）という、シャンパーニュとロレーヌの境あたりの地方名が出てくるのである。漠然とながらイギリスを舞台としているらしい物語の途中にフランスの地名が出てくるのは唐突にも思える。しかしクレチアンほどの作家であれば、たんに詩句の形を整えるためにこの地名を使ったとは思えない。おそらく、身近な読者であったシャンパーニュ宮廷の人間のことを考えたユーモアであったろう。

あるいは同じクレチアンの作とされる『クリジェス』では、アーサー王の宮廷を訪ねてはるばるコンスタンティノープルから船でやってきたアレクサンドルはサザンプトン ("Hantone") で上陸する⁽³⁾。サザンプトンはクレチアンの生きていた12世紀にはすでに大陸との重要な交易港となっていた⁽⁴⁾。しかしクレチアンの他の作品も含めて、韻文であれ、散文であれ、一般にアーサー王ロマンではほとんど言及されることがない⁽⁵⁾。そもそもすでに A. フーリエが指摘しているように、コンスタンティノープルを主な物語の舞台とする『クリジェス』は、アーサー王ロマンの一つに数えられているものの、そこからくるイギリスの地名や地理に関する記述はむしろ現実に近いもので、伝説的なログレス王国の世界とは性格が異なっている⁽⁶⁾。

現代の我々からすれば西欧の中世の人間たちは地理に関する正確さというのに無頓着であったと言われる⁽⁷⁾。地理に関する知識と言えば、聖書や古代ギリシアの地理書をそのまま受け継いでいることが多かった。知識はしばしば地名にすぎないことも多かった。そして現実の地理とフィクションの地理との区別も曖昧であった。だからロマンのようなフィクションの物語

作品のこととなるとなおさら、地理に関する記述と言っても、我々からすれば曖昧でいい加減な地名のリストにすぎないように見える。しかし先に挙げたクレチアンの二つの例のように、中世の物語作者も何らかの意図を持って地名などを使った場合もあったのではないだろうか。

たとえばパイyanはすでに中世文学と地理の不正確さについて語るときに、後者の見方もありうることを認めていた。パイyanが例として取り上げたのは武勲詩の『ギヨームの歌』である。テクストに従う限り、ジロンド河を遡ると、ほどなくそこからはバルセロナ、ブルジュ、ランに数里というところに到着することになってしまう。この不合理は作品がその起源から長い過程を経て現存するテクストにまでなる間に何らかの原因で生じてしまったのだろうか。パイyanは、むしろ「歌い手（ジョングルール）も聴衆と同様に無関心だったのであり、歌い手には本当らしい位置関係などはどうでもいいことだったのだ」⁽⁸⁾と考えた。武勲詩の聴衆の中にはスペインの方へ行ったことのある騎士も少なからずいたはずではないかと。

本稿では12世紀末の韻文ロマン『イポメドン』（ホールデンの刊本による⁽⁹⁾）を例にして、初期の中世ロマンの作者が現実の地理を作品にどのように反映させたのかを調べ、物語の地理世界と作品の成立の背景となっている地理世界への注目が作品理解の有効な方法となり得ることを示したいと思う。

『イポメドン』の作者ユー・ド・ロトランド（Hue de Rotelande）については、この作品と、そしてその続編と思われる『プロテシラウス』⁽¹⁰⁾とに書き込まれていることによってしかわからぬ。ホールデンによれば⁽¹¹⁾、出身地と思われる Rotelande は現在のウェールズ北部の町 Rhuddlan にあたる。『イポメドン』を書いた当時は、イングランドの、それもウェールズとの国境に近い町ヘリフォード（Hereford）⁽¹²⁾近郊で暮らしていたらしい。『プロテシラウス』にはマンモス（Monmouth）の領主への献辞がある。

イギリス人ユー・ド・ロトランドの書いた『イポメドン』の主要な舞台はイタリア半島南部とシチリアである。しかも登場人物の多くの名が、主人公イポメドンをはじめ、ノルマンディー公できえネストールというように、ギリシア人風である。そして物語の内容はと言えば、アプーリアの美しい王子とカラーブリアの若き女公との恋、それに絡めて騎士たるこの王子の勇猛な戦いぶりが語られるというものである。この組合せの背景はわかりやすい。当時イギリスの支配層であったノルマン貴族たちは、共にフランスのノルマン人を先祖とすることから、ノルマン・シチリアのことをよく知っていた。実際に人の往来もあった。ギリシア人風の名については、作者自身が、物語を終わるにあたって「私がここに語ったこの物語から、テーバイの物語が引き出された」（v.10541-10542）と言っているように、フランス語ロマンの『テーバイ物語』が利用された⁽¹³⁾。また、物語の中の状況設定や文体の点では、『テーバイ物語』のような古代ものロマンと、そしておそらくアーサー王ロマンがもとになったと考えられる⁽¹⁴⁾。

物語はだいたい主人公のアプーリア王子イポメドンの行動を追って展開する。とくにその点

に注目すると物語の筋は次のようにまとめられる。

イポメドンは修行の目的でカラーブリアの女公ラ・フィエールの宮廷へ行く。やがて女公を愛するようになるが、彼女のつれない態度を嘆いてその宮廷を去る。いったん故国アプーリアへ戻った後に、ヨーロッパの各地を戦争や騎馬槍試合の機会を求めて旅する（ただし地名の列挙のみ）。2年後、ラ・フィエールの結婚相手が騎馬槍試合で決定されることになる。アプーリアに戻っていたイポメドンは、まずシチリア王メレアジェルのもとへ行き、試合の日を待つ。そしてカラーブリアの首府カタンザーロでの騎馬槍試合には密かに正体を隠して参加し、勝者に選ばれる。しかし彼はその場を去ると、またいたんアプーリアへ戻った後、武勇をみがく旅に出る。そしてフランス国王の宮廷を訪れ、ロレーヌの王との戦いで国王方に勝利をもたらす。その後に使者の知らせで、ラ・フィエールが大インドの君侯レオナンの軍勢に攻められていることを知る。イポメドンは再び正体を隠し、シチリア王メレアジェルの宮廷へ行く。そこへ、レオナンと戦う勇者を探しに、カラーブリアからイスメーヌが使者としてやって来る。狂人を装っていたイポメドンの申し出はいったん断られるが、カタンザーロへ戻るイスメーヌに同行する。その途上、イスメーヌを狙って襲ってくる者たちを倒したので、彼女の信頼を得る。カタンザーロに着いたイポメドンは決闘でレオナンを倒す。しかし彼はレオナンになりますまでカラーブリアを去り、アプーリアへ向かう。そこへ、彼をレオナンと思い込んで追いかけてきたカバネウスが戦いを挑んでくる。その戦いの途中で、正体が明らかになる。イポメドンは引き返し、ラ・フィエールとの喜びの再会となる。そして、アプーリアで、イポメドンとラ・フィエールとの結婚の祝宴が行われ、またイポメドンは父王亡き後のアプーリア王として即位する。

主人公イポメドンは、アプーリア、カラーブリア、シチリアの三つの領国、より正確には、それぞれの首都であるバルレッタ、カタンザーロ、パレルモの三つの町の間を往き来し、そして一度はヨーロッパ各地へ、もう一度はとくにフランスへ長旅をする。もちろんイポメドンのいない場面（ラ・フィエールはイポメドンの出発後、自分の見せた冷たい態度を後悔する）、イポメドン以外の登場人物の移動も語られる（メレアジェルはラ・フィエールの結婚問題に関して裁判を下すためにカタンザーロへやって来る）。しかしそれらはいつもバルレッタ以下の三つの町と関係づけられるものである。

たいていの中世ロマンと同様、この作品でも地理に関する記述と言っても地名の他は乏しく、また地名もそう多くは記されていない。イポメドンが武勲を求めてヨーロッパ各地をめぐる旅に出たというところも、単に地名が列挙されているだけである(vv.1777-1782)。あるいは最初にイポメドンが師傅トロムーと共に、バルレッタからカタンザーロへ馬で旅することを記したところも、「彼らは幾日も旅をして、さまざまな土地と地方とを通り、ついにカラーブリアにやってくると、ラ・フィエールの住む城市に到着した」(vv.319-323)としか書かれていません。アプーリア、カラーブリア、シチリアの位置関係もわからない⁽¹⁵⁾。作品によっては時に、「馬を走らせて2日後に」などというように、現実的ではないにせよ日数が記されている場合もあるが、こ

の作品ではそれもない。カタンザーロの城市のそばに港があることは、アテナイ公が船に乗ってやってくること、あるいはレオナンに捕まることを恐れたラ・フィエールが船で脱出を図ることでわかる。しかしたびたびイポメドンやメレアジェルがパレルモとカタンザーロの間を行き来するものの、その際に海を渡ったのかどうかはわからない。カタンザーロが「当時カラブリアでもシチリアでも他には見られないほどの豊かな町であった」(v.2172-2174)と言っても、とくにこの町についての描写があるわけでもない。

こうした地理に関する曖昧さについて不満を言ってみても仕方がない。中世人は我々のような地理への关心や風景への興味などというものは持っていないかったのだから。従って『イポメドン』についても、ホールデンはそこに描かれたイタリア南部はイギリスの読者にとって、エキゾチズムと言ってもそれほどのものではない、「ほとんど現実を映すところがない (très peu réaliste)」と言っている⁽¹⁶⁾。またレノー・ド・ラージュはイポメドンの活躍する「この騎士物語的地理 (géographie chevaleresque) は生彩に乏しい」ものであり、この物語に出てくる様々な土地や様々な領国の君侯たちは、「別にそれである必然性のない、他のものであっても構わないもの、現実性のないもの (sans réalité)」である、「背景は重要ではない」と指摘している⁽¹⁷⁾。確かに現代の我々の感覚ではこうした判断は当然であるが、現代の我々の地理感覚とは異なる中世人の地理感覚とでも言えるものを考えることができるならば、こうした漠然とした地理にもそれなりの意味を見出すことができるのではないかと思う。

漠然とした地理、ほとんど地名だけの地理とはいいうものの、『イポメドン』は現実の地名をもとにした物語である。そして読者は常に登場人物が今何という土地にいるのか、どこからどこへ行こうとしているのか分かるようになっている。その点では、騎士が主人公でありながら実際の戦いの場面は少ない『ガルラン・ド・ブルターニュ』(1205-1208)⁽¹⁸⁾と同じタイプの作品と言える。『ガルラン』はマリー・ド・フランスのレーの一つ『フレヌ』(ca.1160)⁽¹⁹⁾をもとに書かれている。しかし『フレヌ』が捨て子フレヌを主人公とし、その恋人のドルの領主ゴロンは脇役として、漠然とブルターニュで起きた出来事を語る物語であったのに対して、『ガルラン』ではフレヌの恋人、ブルターニュ伯の息子ガルランの方が主役となり、それと共に、ロッシュニギヨン、ナント、ロンドン、ランス、メス、ルーアンといった現実の地名を背景とした物語となっているのである⁽²⁰⁾。

したがって『イポメドン』は物語空間のタイプからすれば、『獅子の騎士』のようなアーサー王ロマンと対照的である。イヴァンの旅はどことも知れぬ城や森に行き着いては魔法めいた試練に出会い、素性の知れぬ騎士の挑戦を受ける冒険の連続である。それはズムトールが「遍歴騎士の空間」(l'espace du chevalier errant) と呼ぶものであり、「場所 (lieux) というものを欠いた空間」、「騎士がそこを通って行くことによってはじめて場所を生じさせる空間」である⁽²¹⁾。

ズムトールの巧みな定義をもとにすれば、物語空間の二つのタイプと、さらにはその中間的な段階も考えに入れることができるだろう。実際、アーサー王ロマンでも『散文ランスロ』のような作品では現実の地名も多く出てくるのである。すなわち、まず遍歴騎士の空間、つまり名前のない空間があるとするならば、そこはどこかで「乙女の島」(『獅子の騎士』v.5251)と物語の中で呼ばれているようなところにつながっており、さらにはやはり現実にどことあるとも知れぬがアーサー王伝説や数々のロマンによってアーサーが宮廷を開く所の一つとして読者にはなじみのあるカルドウェイユにつながっており、そしてついにはロンドンやカンタベリーに通じているのである⁽²²⁾。

『イポメドン』の作者は遍歴騎士の空間のタイプの物語にまったく関心がなかったわけではない。イポメドンがレオナンとの決闘にのぞむべく、イスメーヌとカタンザーロへ行くくだりはアーサー王ロマン的な冒險を思わせるものである。乙女イスメーヌには小人が同行しており、旅の途上、イスメーヌを自分のものにしようと次々に出現する三人の騎士をイポメドンが倒すのである。しかし、それでもイポメドン一行がパレルモからカタンザーロへ向かっていることは読者にはわかっている。また「乙女の島」のような地名は出てこない。フィクションであり、ただの地名でしかないものの、実在する地名を背景とする物語という点では『イポメドン』は現実的な世界の物語であると言える。

地名は物語の舞台となる場所の名前としてだけ出てくるわけではない。物語の筋との関連の程度は違うものの、テクストの様々なところで地名や地名と関連のある言葉が出てくる。単にイポメドンが訪れたとして言及されるだけの地名、アイルランド王子というような登場人物の領地、「カスティーリアの馬」のような産地、「たとえアラブの王でさえも」というような強調表現、あるいは「かつてリースなるウェールズ人の王がいたが」というように作者が物語の筋とは関係のない話を挿入した時に出てくる言葉などである。(別表にそれらをまとめておいた)

もちろん地名を詩句に入れるることは作詩上の、あるいは修辞上の配慮や工夫によるものも少なくないであろう。それは武勲詩にもロマンにも共通していることである。確かにどの地名を使うかとなれば音綴りや脚韻で選ばれた場合もある。文体の点で『イポメドン』の作者は多くに列挙法を好んだから、地名についても2度ばかり、数行にわたる列挙を行っている(ラ・フィエールについての噂が伝わった土地の列挙、イポメドンが武勲を求めて転戦した土地の列挙)。地名を使った強調表現も登場人物の言葉の中で、あるいは地の文で何度も使われている。あるいは産地をあげる表現も2度ばかり出てくる。

また作者がイギリスの人間であったことを考えれば、イギリスとその周辺、北ヨーロッパの地名が多く出ていることは当然である。また南イタリアを舞台としているにもかかわらずその地域の地名がわずかに三つの領国名とその首府だけであるのも同じ事情によるものであろう。この点では『イポメドン』より後に書かれた『ギヨーム・ド・パレルヌ』(ca.1220) —これも

やはり南イタリアを舞台とした作品でフランス北東部で書かれた一の方がもっと詳しく、ベネヴェント、レッジョ、メッシーナ、チェファルなどの地名、そしてメッシナ海峡のことと思われる地名ファール ("Far") を使って「ファールを渡る」という表現まで出ている⁽²³⁾。

こうした作詩上の必要、作者自身の知識の範囲を考慮に入れた上で、改めて作品に出てくる数々の地名を眺めてみよう。それらは全体として、世界の拡がりを表している。中心にはアブーリアなどの南イタリアがあり、そこから西には (occident という語がしばしば使われている) ロンバルディア (広くイタリア北部のこと) や現在のフランスの各地、イスパニア、ロシア、アレマニア、ハンガリアなどがあり、そして一番外れにイギリスやアイルランドがある。反対側にはギリシアがあり、その先にインドがある。また、この世の西から東までという意味での「アイルランドからルージュ・セール ("Rouge Serre") に至るまで」に出てくるこのルージュ・セールについては、どこをさすのか不明であるが、少なくとも当時の読者には知られていた東方の伝説的な場所と考えられよう⁽²⁴⁾。

ル・ゴフによれば、西欧中世人にとって、「現実世界とはキリスト教圏 (la Chrétienté) であった。」⁽²⁵⁾ すなわちキリスト教徒の住む世界が自分たちの世界であった。ただしその中には自分たちから分離してしまったビザンツ人 (ギリシア人) の住む世界もあった。キリスト教圏の外側には同じ人間とは言え、異教を奉じるイスラム世界があり、さらにその先に何者が住むとも知れぬアジア、ないしインドがあった。しかし「古き時代に」 ("a l'ancien tens" v.5) 起こった出来事として語り始められ、次々に登場してくる人間がギリシア風の名をもった『イポメドン』の世界ではキリスト教と異教の対立は存在していない。レオナンとの決闘に向かうイポメドンを見た者たちはみな「跪き、創造主たる神に ("Deu le creatur")、神が彼に幸いと喜びと名誉とを与えるように祈る」 (vv. 9416-9418)。しかしインドの君侯レオナンも決闘に現れたイポメドンに「武人よ、なんじに神のご加護のあらんことを」 (v. 9441) とよびかける。どちらもいかなる神のことを言っているのかわからない。西側の人間がキリスト教徒であるとわかるところはない。逆に東側の人間が異教徒ともよばれていない。物語の最後になって作者がこの物語が実はテーバイの物語の前段にあたるのだと言っているから辯證は合うのだが、そこで改めて『イポメドン』の世界を見直すと、まずローマの存在が曖昧である。ラ・フィエールは「たとえローマの領主様 ("sire de Rome") であっても」 (v. 126) と言っているが、それが皇帝とも教皇ともわからない。物語には登場しない。次にコンスタンチノープルが全く出てこない。「ギリシア」という語はアテナイ公がイポメドンに自分の国に来るよう勧める時に使われている (v. 5751)。そして同じギリシアのテッサリア公はレオナンの兄弟である。そしてイスラム世界というものもない。ラ・フィエールは「アラビアの王でさえペルシアの王でさえ」 (v. 1029) と言っているが、アラビアもペルシアもそこに言葉として出てくるだけである。むしろ「インドのモール人が作った純金の拍車」 (v. 2740) というようにイスラム教徒のイメージがインドに投影されている。要するにこの物語の世界ではローマもアラブもペルシアもわずかに言及があつ

てもきわめて影が薄い。そしてむしろインドの方に現実感がある。

中世人にとって、インドという地名は、あるいは地上の樂園のあるところとして、あるいは怪物の住むところとして、あるいはまた理想のキリスト教国があるところとして、さまざまな想像をかきたてたところであった⁽²⁶⁾。我々にすれば、もはやそのインドがアジアにあたるのか、あるいはエチオピアにあたるのかもわからない。フランス語ロマンでは『アレクサンドロス物語』⁽²⁷⁾に大王のインド遠征の話があり、またロマンというよりも教訓話集に近い『バルラームとジョザファ』はインドの王子のキリスト教への改宗をめぐる物語である。しかしその他のロマンでは遠い異国、異教徒の大國、高価な織物の産地、奇妙な動物の住む世界として言及されるにすぎない⁽²⁸⁾。

しかし『イポメドン』ではインドそのものが物語の舞台となることはないものの、一つのイメージをもったインドの君侯レオナンが物語に登場する。彼は軍勢を率いてカタンザーロを攻め、ラ・フィエールを得るべく、イポメドンと騎士の決闘をする。彼は「大インドの人間であり、強大な力を持っている総督の息子」なのであって ("il est de Inde la majur,/Ffilz a un riche almazor" v.7697-7698) その容貌については「まことに背が高く、まことに醜悪。頭の髪は巻毛で、赤黒く、顔の色は黒く、艶がなく、また青い。口は斜めに裂け、長い歯は口よりとびだし・・・」(v.7703-7707) などと描写されている。このようにレオナンには、怪物の住むインド、豊かな強国インドのイメージ、そして黒い顔のイスラム教徒ムーア人のイメージが重ねられている。しかもこのレオナンとギリシアのテッサリア公とが兄弟である。南イタリアの東にはギリシアがあり、そこはインドとつながっている。

南イタリアの西側にはヨーロッパの諸侯がいるが、ローマの存在は薄い。反対側にはコンスタンティノープルはなく、アラブもペルシアもいずことも知れず、ギリシアとインドが一つの世界として存在している。こうした図式を見れば改めて南イタリアがこの世界の中心となっていることがわかる。

ラ・フィエールについての噂はヨーロッパ中、イギリスやロシアにまで伝えられていく。またカタンザーロの騎馬槍試合にはイスパニアから、スコットランド、デンマークなどの遠方から騎士がやってくる。ここに多くの地名への言及がされているのは、作者が列挙法を好んだというばかりでなく、まさにシチリア王メレアジェルの威光を示すためであったと思われる。物語の主人公はアブーリアの王子イポメドンであり、その恋人ラ・フィエールであるが、メレアジェルはカラーブリアの宗主であり、ラ・フィエールの結婚相手を選ぶための合議の裁定者であり、彼の名によってカタンザーロでの騎馬槍試合が各地へ伝えられている。アイルランドの王子は、シチリアから見れば世界の果てといるべき土地から、メレアジェルの宮廷に来て幼年期の養育をあおぎ、また騎士の叙任を受けている。そもそも『イポメドン』の物語は、昔のシチリアの王メレアジェルを讃えることから始まり、次いでラ・フィエール、イポメドンの順

で物語に登場するのである。

作者がノルマン・シチリアを物語の舞台に選んだ時、それは12世紀後半にヨーロッパの重要な政治的・文化的中心の一つであり、経済的にも繁栄していたノルマン・シチリア王国、その中心であるパレルモの宮廷の威光をある程度は知っていたからであろう。ノルマン・シチリア領の複雑な歴史を簡単に振り返れば⁽²⁹⁾、かのシャルルマーニュの時代にはイタリア半島南部とシチリアは東ローマ帝国領であり、ギリシア人の土地であった。その後イスラム教徒がシチリアを奪い、そこへアラブ人が入ってくる。しかし、やがてこの地域に傭兵として入って来たノルマン人が諸領国を形成し、ついに1130年ロゲリウス2世によってノルマン・シチリア王国として統一される。領主層こそ渡来したノルマン人の子孫や後から参入してきたノルマン人であったが、住民はギリシア人もアラブ人もいたし、イタリア商人も入って来ていた。パレルモの宮廷ではフランス語が話され、またフランス語の詩も愛好されたが、また公文書ではラテン語とギリシャ語が使われ、ラテン語で歴史が書かれる一方、アラブ詩人も王を讃える詩を書き、地理書を王に捧げた。そしてまた当時十字軍の兵士たちにとって、アプーリアやカラーブリア、シチリアの港は海路聖地へ向かう際の重要な中継地点であった。

この地域の存在はその地名だけでもヨーロッパでよく知られていたと思われる。フランス語文学作品でも、すでに『ロランの歌』(1100ごろ)において、シャルルマーニュに対していつ反乱を起こすとも知れない国としてアプーリアとシチリアの名が挙げられている(v.2923)⁽³⁰⁾。同じく武勲詩の『ニームの輜重』(12世紀中頃)では、商人になりすましたギョームがこれから自分の訪れる先として数々の地名を列挙する場面があるが、その詩句の中の一行為、カラーブリア、アプーリア、シチリアの三つの地名からできている⁽³¹⁾。ロマンでは古代ものやクレチアンには出てこないが、『テュロスのアポロニウス』(1150-1160)では、サラセン人に捕らえられたタルシエンヌが、パレルモで娼家に売られ、王アナスタゴラスの眼に止まる⁽³²⁾。『鳶』⁽³³⁾や『ペルスヴァル第一続編』(1200より前)⁽³⁴⁾でも、地名の列挙の中にカラーブリア、アプーリア、シチリアの三つの地名が出てくる。また『ガルラン・ド・ブルターニュ』では、ブルターニュの修道院でフレヌスが針仕事を習ったというところで、「これほどすぐれたお針子はアプーリアまで探しても他にはいない」と、"Pouille"と"aguielle"とで韻を踏ませている⁽³⁵⁾。

しかしこれほど文学作品でもよくその名が挙げられたにもかかわらず、フランス語ロマンでこの地域を物語の舞台にしたのは、『イポメドン』が現存する作品では最初であり、同じユード・ロトランドによる続編『プロテシラウス』以外には、先にあげた『ギョーム・ド・パレルヌ』しかない。

フランス語の中世ロマンが地理的にさまざまな地域を舞台にしていると言っても、それはすでにフランス語圏外で存在し伝えられていた作品や伝承をフランス語に翻案したり、取り込んだ作品が少なくないからである。『テーバイ物語』などの古代ものロマン、小アジア地中海沿岸を舞台とする『チュロスのアポロニウス』などはラテン語作品の翻案であったし、イスパニア

とバビロニア（カイロのこと）が舞台となる『フロワールとブランシュフロール』（1160より後）はアラビア語の話が原型となっていると推定されている。あるいはローマからコンスタンティノープルへと舞台が移る『エラークル』（1159–1184）はビザンツ皇帝ヘラクリウス1世（v.575–641）の事績が材源の一つになっている。数多く書かれたアーサー王ロマンは、漠然とイギリス全体やアイルランドを舞台にしているが、それも、ケルト伝説やジョフリー・オブ・モンマスのラテン語本『ブリタニア列王史』がもとになっていると言える。

しかし、イギリス人ユー・ド・ロトランドは先に何らかの形でイタリア南部にあった伝承なり物語作品なりをもとにして『イポメドン』を書いたのではないようである。彼が意図してイタリア南部を舞台に設定したのである。しかも遠い昔ということでギリシア人の住む世界にしている。確かにノルマン・シチリアは、かつてはビザンツ人すなわちギリシア人が支配し、当時もビザンツ人の残っていた地域である。しかしヨーロッパ諸侯の名までテーバイ物語などから借りてくることによって、当時の読者にとっても物語が全くのフィクションであることは明らかであったろう。この点では『ギヨーム・ド・パレルヌ』とも異なっている。こちらの物語はアプーリアの王子ギヨームが主人公で、彼が篡奪された王位を取り戻すと共に、ローマ皇帝の娘メリオールと結ばれる経緯が中心に語られている。主人公の名ギヨームはノルマン人の名であり、またローマの皇帝とギリシアの皇帝（すなわちコンスタンチノープルの皇帝）が出てくることでもわかるように、こちらの方は作品の書かれた時代（1220ごろ）に似合った物語世界になっている。

物語の地理的世界の中心がイタリア南部となればイギリスはその世界のまさに辺境である。地名の列挙の中でスコットランドには「かなたの土地」という言葉が付け加えられている（"Escoce, une lointaine terre" v.3379）。また、作者はこの世界の西の果てと言うとき、当然のことながらいつもイギリスとその周辺の地名を使っている。この世の中でと言う代わりに出てくる「アイルランドからルージュ・セールにいたるまで」（v.3138）、「スコットランドからローマにいたるまで」（v.9698）という表現、あるいはイポメドンによるやくめぐり会えたアプーリアからの使者の言葉「イギリスの海にいたるまで、苦労してその端から端まであなたさまを探して求めることをしなかったような土地がただの一つでもあるとは思われません。」（vv.1643–1646）。こうした表現はとくにイギリスのアングロ・ノルマン人読者にはあるいはユー・モラスな、あるいは皮肉めいた表現に思えたであろう。しかも作者は物語の途中で2度、物語を中断して作者や読者にとって身近なイギリスの町ヘリフォードに関する話を数行ずつ挿入している。

このように南イタリアが中心で、イギリスが辺境となる地理的世界、それはまさにブリタニアの王アーサーの物語の地理的世界と対照的である。ここで興味深いのは作者が二度目にヘリフォードの町の名を挿げる箇所、「ウェールズの王リース」に言及する箇所である。物語の方は

イポメドンがイスメーヌと共にカタンザーロへ向かう途中、イスメーヌを狙って三番目にレアンデルが現れた場面。語り手は、兄のレオナンがレアンデルにイスメーヌを与えることに同意していたと述べ、それに続けて「それはちょうどかつてあるウェールズの王がしたのと同様であった。私が思うに、その王の名はリース (Ris) であった。彼はイングランドの土地を多く自分のものにしていた。そして卑しい家来ども ("ses hirdmans") にヘリフォード、グロスター、シェルーズベリー、ウースターを分け与えた。しかしそのため彼は自分の土地を奪われるということにならなかった。彼と彼の家臣どもは敗れたのだから。なぜなら彼は打ち負かされ、ひどい扱いを受け、みじめに追い払われ、敗れ去ったのだ。」(v.8941-8950) ここでリースなる王は、物語の中すでに怪物じみた存在として描写されているインドの君侯、レオナンに関連づけて言及されている。またリースの家来を *hirdmans* と言っているところには、ホールデンの注によれば軽蔑の意が込められている⁽³⁶⁾。従ってこの箇所からは、作者とその周辺のアングロ・ノルマン人たちのウェールズ人に対する憎悪、恐怖、軽蔑がうかがえるのである。

リースと呼ばれている王について、ホールデンは Rhys ap Gruffydd, 1155年から1197年の間、アングロ・ノルマン王権の南ウェールズ侵略に頑強に抵抗したウェールズの首長のこととさしていると推定している⁽³⁷⁾。『イポメドン』の作者ユー・ド・ロトランドが住んでいたと推定されるヘリフォードなどは、征服王ウィリアムがウェールズ攻略のために1070年前後に設置した辺境伯領の一つであった⁽³⁸⁾。こうしてアングロ・ノルマン軍とウェールズ側の国境をめぐる戦いが始まる事になる。スティーヴン時代の王権の衰退期には一時的にウェールズ側が国境線を東に押し戻したが、プランタジネット朝ヘンリー2世 (1154-1189) が征服を再開、これに抵抗したのがリースである。ただし1170年ごろからはヘンリー2世は対フランス戦争などに力を入れる必要が生じたためか、ウェールズ側と和解し、ヘンリー2世の死まで両者の関係はまず平穏であった。しかしぬし次にリチャード1世が王位につくと再びリースとの関係が悪化していく。

ユー・ド・ロトランドが『イポメドン』を書いた時期にアングロ・ノルマン宮廷がウェールズに対してどのような態度をとっていたにせよ、ヘリフォードなどの国境地帯のアングロ・ノルマン人々はそれまでの経緯もあってウェールズ人を憎悪していたに違いない。『イポメドン』に描かれたレオナンにむしろウェールズ人に対するイメージがうかがえるように思う。

ところでアーサー王伝説の源はアングロ・サクソン人と戦ったブリトン人の英雄であり、ブリトン人の子孫の一派たるウェールズ人の間においてもこの伝説が普及していくことはよく知られている。アーサー王伝説・作品に対するノルマン朝宮廷、プランタジネット朝宮廷の態度もまた単純なものではなかったようである。しかし少なくとも12世紀末の国境地帯のアングロ・ノルマン貴族の多くにとっては、ウェールズ人の心の拠り所にもなっていたイギリス王アーサーという伝説的存在が疎ましいものであったことは想像できよう。ところがたとえばクレチアンの『荷車の騎士』の冒頭の句は、「ブリタニアのすぐれた王アーサー」("Artus, li boens rois

de Bretagne") であり、そして物語は「王はウェールズのカルデュイユにいた」(v.7) で始まっている。こうした作品が彼らにも歓迎されたとは思えないものである。

『イポメドン』とクレチアンの作品との関係については、かつて、まず『イポメドン』はクレチアンの模倣であるとする見方が提出され、次にそれに対する反論が出て論争となったものの、そうした議論によくあるように、はっきりした結論は出なかったようである⁽³⁹⁾。ホールデンはそうした経緯を踏まえてか、慎重な言い回しで次のように言っている。「ユー・ド・ロトランドがクレチアンの作品を活用したということは証明可能であるとは思わない。もちろんメレアジェルの宫廷がアーサー王の宫廷を敷き写しにしたものであることは疑いえないことと思われる。」⁽⁴⁰⁾だいたい中世ロマンの作者が何らかの先行作品を参考にしていたとしても、必ずしも常にそれに忠実に自分の作品を書いたとは思えない。最近ではカリーンは『イポメドン』における作者の騎士道や恋愛に対する見方などを論じて、『イポメドン』が「先生」(Master) であるクレチアンの作品の「模倣であると同時に、そのパロディ、それに対する敬意、その批評でもありえた」とする見方を示している⁽⁴¹⁾。『イポメドン』にクレチアンの作品のパロディとなっている、あるいはアーサー王ロマンに対するアンチテーゼとなっている面を認めるとなれば、『イポメドン』とクレチアン作品との関係が単純に解決のつく問題ではなかったのは当然である。

ユー・ド・ロトランドがクレチアンの作品を知っていたとして、彼がそれをどのように評価していたのかというのは簡単に解決のつく問題ではない。しかし彼がクレチアンなどのアーサー王ロマンにある種の興味を持ったものの、ノルマン人であった彼にはウェールズ人の英雄アーサー王の物語世界を受け入れるわけにはゆかず、古代ものロマンなども参考にして、ここにノルマン・シチリアの王メレアジェルの世界の物語を書くことになったのではないかということは考えられる。確かに『イポメドン』にはアーサー王ロマンに特有のモチーフが使われている。三日間の騎馬槍試合、incognito の状況、ラ・フィエールという名、異界からの侵入者とも思えるレオナン、など。しかしそこにはアーサー王ロマンの特質とも言うべき驚異 (le merveilleux) が欠けている。と同時に遍歴の騎士の空間の旅もない。そしてあのインドさえも中に取り込んだ現実的な地名の世界、しかもそれが全くのフィクションであることも明瞭な世界を背景とした物語を書いたのである。そのほとんど地名だけの世界には、ウェールズ人はもちろん登場しない。そして数度イギリス (Angleterre) への言及はあるものの、イギリス国王の存在はどこにも語られていない。

ル・ゴフは西欧中世人が二つの拡がりの中で生きていたことを指摘している⁽⁴²⁾。それは広く暗い森に囲まれた城や町という生活の場と、キリスト教世界 (chrétienté) という国境のない広大な空間のことである。中世人は一方では城壁や市壁の外に出れば、はてしなく続く森の中に迷い込んでしまうおそれがあった。森は獣や妖精の住むところであり、不思議なことに遭遇す

るところであった。しかしながら中世人の中には、巡礼や十字軍、統治や交易や学業のためにキリスト教世界の端から端まで旅する人間もいた。従って周囲の森は恐怖の対象でしかなくとも、遠い異国の地理についてもある程度の知識は持っていた。それがしばしば単なる地名だけのもの、曖昧なもの、およそ現代のわれわれからすれば想像力の産物でしかなかったとしても。

中世ロマンの物語世界もこうした二面性が反映されているように思われる。遍歴騎士の物語の空間はまさに森を舞台とするものである。それに対して現実の地名を背景として書かれたロマンもあった。確かにわれわれからすれば中世人の持っていた地理の知識は不正確で、不十分で、曖昧であった。しかしながらこそ『イポメドン』のような作品が書かれたのだといえる。ほとんど地名ばかりの地理でロマンが書かれていた時代であったからこそ、イギリス人が自由にノルマン・シチリアを中心とした物語世界を作り、そこにギリシア人を住まわせることができたのではないかと思われる。

〈『イポメドン』に出てくる地名、および地名に関連する語〉
物語の重要な舞台となっているのは、

アーリア（首府はバルレッタ）、カラーブリア（カタンザーロ）、シチリア（パレルモ）、および
フランス（パリ）
イポメドンが騎馬槍試合や戦争を求めて旅したところとして列挙される地名（vv.1777-1782）
フランス（イル・ド・フランス地方のこと）、ノルマンディー、フランドル、ブルゴーニュ、オーヴェルニュ、ガスコーニュ
ラ・フィエールがはじめに結婚相手の候補者として指名した三人
ロシア王子、ノルマンディー公、アイルランド王子

カタンザーロの騎馬槍試合にやって来た騎士たち

- ・西（occident）の方の者たち（v.3326）としてひとりずつ語り手が紹介する。
アイルランド王子、ノルマンディー公、ブルターニュ伯、デンマーク王（ノルウェー、ゴトラント、オークニー、アイルランド、スコットランドの騎士たちが同行）、イスパニア公、ローヌ王、アレマニア王、フランドル伯
- ・さらに戦いの途中でアレマニアの伯が参加していることがわかる
- ・3日目にアテナイ公が船でやってきて参加する

カタンザーロを攻めてきた騎士

大インドの君公レオナン、その兄弟でテッサリア公レアンデル
傲岸なラ・フィエールという噂が広まったところとして列挙される地名（vv.144-150）
ロンバルディアからフランスまで、ブルゴーニュ、ポワトゥー、オーヴェルニュ、アンジュー、ロレーヌ、ハンガリー、フランドル、ノルマンディー、イングランド、ブルターニュ、ロシア、アレマニア

フランス国王とローヌ王との戦いで戦った者たち

ノルマンディー人、フランス人、ブルターニュ人、フランドル人、アレマニア人、ローヌ人
産地として
カスティーリアの馬（v.3899）、インドのモール人が作った純金の拍車（v.2740）

誇張ないし強調の表現で

- ・たとえローマの領主様 (sire) でさえも夫にはしたくない (ラ・フィエールの言葉 v.126)
- ・インドから西 (occident) にいたるまでこれほどすばらしい女性はいない (ラ・フィエールについてのアーリア宮廷での噂 v.219)
- ・これまでアラビアの王もペルシアの王も恋人にしようとはしなかった (ラ・フィエールの言葉 v.1029)
- ・アーリア出立以来、イポメドンを探して諸国を旅して来た者が、自分はイギリスの海にいたるまで苦労してあらゆる土地を探してきたと言う (v.1643)
- ・アイルランドから Ruge Serre に至るまで、二つの海の間にある土地で、そこからこの壮大な騎馬槍試合に騎士のやってこないところはなかった (語り手がカタンザーロでの騎馬槍試合について v.3138)
- ・ここからローマに至るまでこれほどすばらしい馬はいない (カタンザーロの騎馬槍試合で従士ジャゾンが言う v.3825)
- ・ここから西洋に至るまででもっとも不忠な者 (カタンザーロの騎馬槍試合でジャゾンがラ・フィエールの家臣アンフィオンについて言う v.3827)
- ・彼女との結婚ができないのであればコーンウォールにでもいた方がましだ (語り手がカタンザーロの騎馬槍試合で激しく戦っている騎士たちの想いについて v.4939)
- ・スコットランドからローマまで自分ほど強い者がいるとは思わない (レオナンの言葉 v.9698)

その他

- ・アテナイ公はイポメドンにギリシアに来ればミケーネとデュラツォの城をやろうと言う。 (v.5751-5757)
- ・ロレーヌ王はイポメドンに自分の頼みを聞けばサクソニアをやろうと言う (v.7548)
- ・ラ・フィエールの相談相手イスメーヌはブルゴーニュ公の娘であり、愛するイポメドンに自分と共にブルゴーニュへ来るよう頼む。

作者が物語と直接関係のない話を挿入する

- ・ヘリフォードでは海の向こうでの戦争が話されることがあった。それは王がルーアンを攻めたときの戦いである (v.5351)
- ・かつてリース (Ris) なるウェールズ人の王がおり、彼はイングランドに多くの土地を所有していた。そしてヘリフォード、グロスター ("Gloucestre", Gloucester), シュルーズベリー ("Salopesbre", Shrewsbury), ウースター ("Wirecestre", Worcester) をその卑しい家臣どもにあたえた (v.8941-8947)
- ・私は Credehulle [ヘリフォード近郊] に家を持っている (v.10571)

注

- (1) 本稿では地名・人名の日本語表記については適宜フランス語読み、イタリア語読み、英語読みなどとした。従って例えばイタリア語読みの「アーリア」はテクストでは "Puille", "Poile", "Poille" の形、現在のフランス語表記の Pouille に相当する。また逆にテクストの "Engleterre", "Engleteerre", 現在のフランス語表記 Angleterre の語については場合によって「イギリス」あるいは「イングランド」と表記している。ただし作中人物の名についてはフランス語読みとした。
- (2) *Le Chevalier au Lion*, éd. Roques, v.3224-3228.

- (3) *Cligés*, éd. Micha, v.269.
- (4) Cf. P.Rickard, *Britain in Medieval French Literature 1100–1500*, Cambridge Univ. Press, 1956, pp.23–27.
- (5) G.D.ウェストのリストでは『クリジェス』以外では、『ブリュ物語』、『ペルスヴァル第一続編』、『散文クリジェス』だけである。Cf. G.D.West, *An Index of Proper Names in French Arthurian Verse Romances 1150–1300*, Tronto, Univ. of Toronto Press, 1969; *An Index of Proper Names in French Arthurian Prose Romances 1150–1300*, Tronto, Univ. of Toronto Press, 1978.
- (6) Cf. A.Fourrier, *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen-Age*, tome I, Paris, Nizet, 1960, pp.154–155.
- (7) 西欧中世における空間や地理に関する問題については P.Zumthor を参考にした。P.Zumthor, *La Mesure du monde*, Paris, Seuil, 1993. 地理学としての géographie については同書 p.226–233. を参照。
- (8) J.Ch.Payen, *Littérature française, Le Moyen Age I*, Paris, Arthaud, 1970, p.61.
- (9) *Ipomedon, poème de Hue de Rotelande (fin du XIIe siècle)*, édité avec introduction, notes et glossaire par A.J.Holden, Paris, Klincksieck, 1979.
- (10) 『プロテシラウス』には Kluckow の刊本があるが筆者未見である。Cf. *Protheselaus*, éd. F. Kluckow, Dresde et Halle, 1924.
- (11) 前掲 A.J.Holden, *Ipomedon*, pp.8–11.
- (12) 『イポメドン』が書かれた時期よりは後の時代であるが、中世の世界図の一つとして有名なヘリフォード図は、1275年頃にハルディングムのリチャードが完成し、このヘリフォードの大聖堂に飾られたものである。ジョン・ノーブル・ウィルフォード『地図を作った人びと』鈴木主税訳 河出書房新社, 1988, pp.76–78.
- (13) 『テーバイ物語』ではイボメドンはアルゴス勢の武将の一人であり、テーバイ勢との戦いの途中に川で溺れ死ぬ。*Roman de Thèbes*, éd. G.Raynaud de Lage, 1969–1971. すでにある作品の物語の続きという体裁で、あるいは逆にこのように時間的に前になる部分という体裁で作品を書くのは中世ではよくある手法である。
- (14) A.J.Holden, *op.cit.*, pp.44–52.
- (15) ちなみに現在の地図で言えば、アブーリアは長靴の形をしたイタリア半島の踵とその上あたり、カラーブリアはつまさきのあたり、そしてその先にシチリア島がある。
- (16) A.J.Holden, *op.cit.*, pp.45.
- (17) G.Raynaud de Lage, «L'oeuvre de Hue de Rotelande» in *Grundriss der romanischen Literaturen des Mittelalters*, vol. IV, tome 1, Heidelberg, Carl Winter, 1978, p.281.
- (18) *Galeran de Bretagne*, éd. Lucien Foulet, 1925. なおフーレのこの C.F.M.A. 版では作者を Jean Renart としているが、現在ではテクストに記されている Renaut は Escoufle などで知られる Jean Renart とは別人とし、Renaut を作者としている。Cf. *G.R.L.M.A.*, vol. IV, tome 2, p.193.
- (19) *Fresne*, in Marie de France, *Les Lais*, éd. Jean Rychner, 1966.
- (20) A.フーリエの前掲書では、『クリジェス』と共に『ガルラン』も取り上げられている。
- (21) P.Zumthor, *op.cit.*, p.208.
- (22) もちろん G.D.ウェストの前掲書に見られるように、アーサー王地名学あるいはアーサー王地理学とよびうる研究では、実在しない多くの地名について、その起源を調べ、あるいは他の地名との位置関係を考慮して、現在のイギリスの地名との対応や位置が推定されている。G.D.ウェストのリストによれば、『獅子の騎士』の「乙女の島」についてはスコットランドの Caerlaverock がその伝説の起源となっていると推定する研究者がおり、また多くの作品に出てくるカルドウェイユについて

は、『獅子の騎士』ではウェールズにあるとなっているが、一般にイングランド北西部のカーライル (Carlisle) のことと考えられている。またミーシャは『散文ランスロ』三部作に出てくる地名のうち、実在の地名 (Londres など) およびある程度位置を推定できる地名 (Camaalot, Forêt Périlleuse など) を書き入れた大アリテン島の地図を作成している。が、もちろんすべての地名を書き入れることはできないし、Camaalot のように「(?)」の付く場合もある。Cf. A. Micha, *Essais sur le cycle du Lanceot-Graal*, Genève, Droz, 1987, p.282.

- (23) *Guillaume de Palerne*, éd. A. Micha, 1990, v.117.
- (24) ホールデンは注で（前掲書 p.541）この地名がどこのことか identifier できなかったと認めた上で、"serra" は montagne の意味であろうと付け加えている。ちなみに最近の A.モワザンによる武勲詩の固有名一覧によると、やはり "Rouge Serre" は出ていないが、"Rouge Montaigne" というのが出ていて（14世紀の *Baudouin de Sebourg* のみ）、これはかの「山の長」(le Vieux de la Montagne) を首領とするイスラムの暗殺者集団の本拠地のことであるとなっている。Cf. A. Moisan, *Répertoire des noms propres de personnes et de lieux cités dans les chansons de geste françaises et les œuvres étrangères dérivées*, tome I, vol.2, Gen# ve, Droz, 1986, p.1358. このイスマイリ派の暗殺者集団の本拠地はテヘランの西北のエルブルツ山脈中にあり、十字軍兵士に恐れられた。岩村忍 責任編集『西域とイスラム』（中公バックス「世界の歴史」）中央公論社、1983, p. 334-341.
- (25) J. Le Goff, *La civilisation de l'occident médiéval*, Paris, Arthaud, 1977, p.178.
- (26) 西欧中世人にとっての「インド」については、次の2点を参考にした。J. Le Goff, 『L'occident médiéval et l'océan Indien: un horizon onirique』, *Mediterraneo e Oceano Indiano, Atti del VI Colloquio Internazionale di Storia Marittima*, Florence, Olschki, 1970, pp.243-263, repris in J. Le Goff, *Pour un autre Moyen Age*, Paris, Gallimard, 1977, pp.280-306. 彌永信美『幻想の東洋 オリエンタリズムの系譜』 青土社、1987, pp.175-192.
- (27) *Roman d'Alexandre* にはさまざまな version があるが、いわゆる Alexandre de Paris 版 (1180-1190) ではゴグ・マゴグとギリシア勢の戦いの場面が伝えられている。Ed. E.C. Armstrong et al., 1937.
- (28) クレチアン『エレックとエニード』では、ドレスの裏地の毛について、インドで生まれる奇妙な動物からとったものと言われ (Ed. Roques, v.6738), また『ガルラン・ド・ブルターニュ』ではインド産の高価な絹織物が出てくる (Ed. Foulet, v. 4680)。また『鳶』ではエルサレムを攻めてきた「大インドの王」("li rois d'Inde le Major") とモスルの王の軍勢をリシャール以下のキリスト教徒勢が迎え撃つが、「大インドの王」と言っても単に聖地を襲う異教徒勢の王の一人というだけで特にインドについての何らかの具体的なイメージがうかがえるわけではない (Ed. Sweetser, v. 788)。
- (29) ノルマン・シチリアの歴史とパレルモの宮廷文学については、R.R. Bezzola, *Les origines et la formation de la littérature courtoise en Occident (500-1200), troisième partie, la société courtoise: littérature de cour et littérature courtoise*, Genève, Slatkine, 1984 (Réimpression de l'édition de Paris, 1967), pp.486-511. を参考にした。
- (30) *La Chanson de Roland*, éd. G. Moignet, v.2923.
- (31) *Le Charroi de Nîmes*, éd. J.-L. Perrier, v.1192.
- (32) 15世紀のフランス語の version については M. Zink の刊本がある。Le roman d'Apollonius de Tyr, édition, traduction et présentation de Michel Zink, Coll.10/18, Paris, U.G.E., 1982.
- (33) *L'Escoufle*, éd. Sweetser, v.4213-4215.
- (34) *Première Continuation de Perceval*, éd. Roach, mss TVD, v.7304.

- (35) *Galeran de Bretagne*, éd. Foulet, v.1159-60.
- (36) A.J.Holden, *op.cit.*, p.566.
- (37) Ibid., pp., *op.cit.*, p.10.
- (38) アングロ・ノルマン朝とウェールズ人との関係については文献を参考にした。青山吉信『アーサー伝説—歴史とロマンスの交錯』岩波書店 1985, pp.273-274, 280.
- (39) 『イポメドン』の最初の校訂者 E.ケルビング (E.Kölbing) がすでにクレチアンの影響を認め、これに対して L.M.ゲイが反論している。L.M.Gay, «Hue de Rotelande's Ipomedon and Chrétien de Troyes», *P.M.L.A.*, XXXII, 1917, pp.468-491.
- (40) A.J.Holden, *op.cit.*, p.52.
- (41) W.Calin, «The Exaltation and Undermining of Romance: Ipomedon» in *The Legacy of Chrétien de Troyes*, edited by N.L.Lacy et al., vol.II, Amsterdam, Rodopi, 1988, p.112.
- (42) Cf. J.Le Goff, *La civilisation de l'occident médiéval*, p.175.